

令和元年6月6日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17415

研究課題名(和文) コミュニケーション論に基づく学校英語教育のエスノグラフィー

研究課題名(英文) Ethnography of English language education in school as communicative events

研究代表者

榎本 剛士 (Enomoto, Takeshi)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：30582192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学校、および、教室という場所で生徒が英語を学ぶ際、生徒の「メタ語用的意識」、すなわち、自分たちが「行っていること」に関する意識が、「英語」に様々な形を与えていることが明らかとなった。「英語」は単なる「学ばれる対象」として「そこにある」のではなく、学校や教室で「生徒として振る舞う」ことを可能にするリソースとして存在しており、このことは、「学校」という制度的な場における社会化の媒体として英語が機能していることを強く示唆している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「学校で年間も英語を勉強したのに、なぜ英語ができるようにならないのか」という問いに対し、教育(学)的な視座からの回答(例：学習時間の決定的な不足)とは異なる性質の知見を提供することができる。生徒たちは、学校という場所で、生徒として適切・効果的に振る舞うために、英語を巧みに駆使しており、その意味で、彼/女らは極めて有能な英語使用者である。つまり、生徒たちは、「学校」「教室」という文脈に根差した形で「英語ができる」ようになっているのである。このような視座は、「英語ができない」から出発する思考や、言語(外国語)習得の過程を社会・文化的実践と切り離す発想に大きな一石を投じるものである。

研究成果の概要(英文)：The current study has revealed that English students are supposed to be learning in school and classroom takes different shapes depending on students' metapragmatic awareness, an awareness on "whats is going on" or "what is being done". This strongly suggests that English is not simply "out there" as an object to be learned. Rather, the study shows, it is an available resource for students that allows them to "act like students", and thereby functioning as a medium for socialization at school, a highly institutional site.

研究分野：語用論、記号論、教育言語人類学

キーワード：学校英語教育 エスノグラフィー コミュニケーション論

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

教育という実践、および、学校という場所は、教育学のみならず、文化人類学、言語人類学、社会学などの社会科学諸分野においても、長らく研究の対象とされてきた。

これらの研究は、学校や教室という場所が、異なる人々(子どもたち)によってどのように経験されているかを「内側の視点 (native's point of view)」から分析することを目指してきた。また、教室における相互行為の詳細な分析や、学校でのコミュニケーション・パターンと生徒が属するコミュニティでのコミュニケーション・パターンとの比較、および、統計的社会調査などを通じて、教室の相互行為がアイデンティティや権力関係といった社会的関係の不均衡を維持・(再)構築していること、さらに、教育がコミュニケーションの媒体や資本の社会的配分、階級の再生産に大きく関与していることが明らかとされてきた。

第二言語習得研究の分野においても、言語習得を「頭の中での情報処理プロセス」として捉える「認知的アプローチ」が主流であったが、特に2000年以降は、言語習得をコンテクストや相互行為との関連で捉える「社会的アプローチ」からの研究も盛んに行われるようになっていく。加えて、近年の教室談話研究では、教科・教材内容などの学習対象も決して所与のものではなく、相互行為を通じて「学習可能なもの (learnables)」「学習に関連がある要素」として立ち現れるものである、という研究成果が得られている。

上記、社会科学諸分野における教育研究、そして、「社会的アプローチ」からの第二言語習得研究の流れを汲む本研究は、「学校で英語を学ぶ」ことを単なる言語的知識の伝達・習得の問題として見るのではなく、コンテクストに根差した相互行為を通じて変容するアイデンティティ・権力関係、および、そのようなプロセスに伴って異なる形を纏うようになる学習対象の問題として捉えるものである。

さらに、今日の日本の英語教育においては、「コミュニケーション」が目標として掲げられ、生徒が教室で英語を使う場面も増えているが、それにもかかわらず、生徒の英語力が伸びない場合、学習上の問題点をどこに見出せばよいのか。本研究は、「コミュニケーション」に関する明確な考えや定義、および、教室で何が起きているかに関する理解が不在のまま「コミュニケーション」に激しく傾倒する昨今の英語教育(政策)に対し、批判的まなざしを「教室の現実」から投げかけることを可能にするものでもある。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、エスノグラフィーの手法に基づき、学校で行われる英語の授業における生徒のメタ語用的意識と「ラーナブル (learnables)」としての英語との関係をコミュニケーション論の観点から解明することである。学校、あるいは、教室における「行為」自体が生徒によってどのように理解され、その結果、「学習に関連がある要素 (=ラーナブル)」としての英語が生徒によってどのように理解・経験・内面化されているかを明らかにすることで、英語教育の問題を社会と相互行為(コミュニケーション)の問題として研究する枠組みの構築を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究では、石川県金沢市の中学校に週1回の頻度で1年間通い(2017年4月18日~2018年3月20日、計40回、大学夏季休業期間中は週2回の場合もあり)データ収集を行った。当該年度、調査に協力して下さった英語科教諭が級外となったため、特定のクラスに張り付くのではなく、複数のクラスの英語授業を訪問し、主に各英語授業でデータを収集する形をとった。

具体的に収集した主要なデータは、フィールドノート、授業の録音(ICレコーダー毎回4~6台使用)、スピーキング・テストの録音、授業の画像、授業の映像(ビデオカメラ毎回1台使用)、毎回の授業後に提出される生徒の「自己評価」カードの画像、生徒が提出したプリントの画像、生徒へ行った記述式アンケート(複数回)、英語科教諭へ行ったインタビューである。また、英語授業外で収集したデータには、教室・廊下の掲示物の画像、全校集会・学年集会・部活動・学校行事の様子の記録、学校のパンフレット(学校要覧)等が含まれる。

言語人類学のコミュニケーション論に依拠した授業の談話分析を中心に据え、それを授業の「自己評価」カードやプリント、記述式アンケート、教室に掲示されている行事の振り返り等に示されている生徒たちの言葉と突き合わせながら立体的な分析にしていき、「学校」や「学級」というコンテクストをなるべく犠牲にすることなく、英語の授業で為されていること、および、その中で「英語」のあり様を記述した。

### 4. 研究成果

現在、1年度分のデータの整理と(仮)分析を継続しているが、その中で下記のこと明らかになってきている。

#### (1) 社会レベル

主に記述式アンケートを通じて、生徒たちの多くが「グローバル化」や「国際化」という言葉を意識化(実際に使用)でき、それらとの関係において「国際(共通)語」としての「英語」の必要性を感じていることが明らかとなった。また、生徒たちは、「外国人とのコミュニケーション」や「将来」に役に立つものとして英語を認識しており、この点において、彼/女らも英語に関する一般的な言説(ステレオタイプ)の渦中でそれを内面化していることが認められる。

親・親戚の影響や、海外旅行経験に言及する生徒もあり、このことは、家庭環境（特に親の職業や家庭の経済的状況）も英語に関する認識や態度に大きな影響を及ぼしていることを示していると考えられる。

## (2) 「生徒」という役割レベル

「外国人とのコミュニケーション」や「将来」に役に立つものとして認識・対象化されている英語は、「生徒」という役割を通じて「学校」という文脈に引き込まれると、その姿が大きく変貌する。

特に目を引くのが、生徒たちが英語について語る際に使う「苦手」「難しい」「楽しい」といった言葉である。「学校」という特定の制度的な場にいる生徒たちは、英語をまずもって「教科」として認識し、(試験で)良い成績を修める、授業や課題に頑張っており取り組む、チャレンジする、苦手を克服する、力をつけていく、といった枠組みの中で、自分たちの「行為の意味」を解釈している。そのような「行為の解釈」の中にある「英語」は、上記の諸々の行為の成就を促したり、妨げたりするものとして現れてくるようである。

## (3) 授業レベル

生徒たちが学校で英語に触れる場は主に授業であるが、授業は「英語」という客観的な知識が単純に伝達される場ではない。このことは、授業中の様々な活動における生徒の言動によって指し示されている。

まず着目すべきは、教師の英語を全員でリピートする、ペアで練習する、個人で練習する、それぞれの活動で、生徒の声のトーンが大きく異なることである。それぞれの活動では、「全員で合わせる」(逸脱しない)、ペア活動を「進める」(あるいは、「楽しむ」「終わらせる」といった「縛り」が生徒にはあり、そこから解放されるのが個人練習であると考えられる。

また、教師に当てられ、英語の会話を(ペアで)起立して行う生徒は、他のクラスメートたちの「目」にかなり敏感である。つまり、彼/女らは、クラスメートたちの期待や、即興のコメント(つつこみ、野次)という評価に晒されており、そのような状況の中でうまく振る舞う、そのような状況にうまく対処する、という実践に英語の使用を通じて従事しているように思われる。

さらに、「授業を成立させる」という意味において、同じクラスの生徒たちは極めて協働的に振る舞っているが、その際、学校行事での出来事や各生徒がそこで担った役割といった、「学級として共有された体験」が共通の資源として利用されることが多々、ある。このような資源と結びつくことで、「英語」、および、英語に関するコミュニケーションとしての「授業」が、それぞれの学級や生徒たちにとって意味のあるものとなる。

少なくとも上記の異なる「レベル」を設定し、それらの相互作用の中で「英語」がどのようなもの(対象)として立ち上がっているか、という視座が、「生徒たちが学校で学んでいる英語」の内実を捉えるうえで不可欠である。

## (4) 当初は予期していなかった成果

上記の通り、本研究は、「学校」や「教室」で学ばれる「英語」を実体化せず、コミュニケーションを通じて、また、教室でのアイデンティティや権力関係の変容に伴って形を変えるものとして「英語」を捉えた。このような分析が、公教育における英語教育の目的論に関する新たな視座の模索に繋がったことは、当初は想定していなかった成果である。

興味深いことに、少なくとも生徒たちにとって、「異文化理解」は英語学習を動機づけるものではないようであった。他方、「さんと話せてよかった」「さんの意見が聞けてよかった」といった形で、教室における「意見交換」の意義が生徒たちによる「振り返り」で指摘されることがしばしばあった。

今日の英語教育においては、「コミュニケーション」が目指されているが、その際、「コミュニケーション」は、所謂「4技能」に矮小化されることが多い。しかし、「4技能」は「媒体」の問題であり、コミュニケーションを目指す教育の「目的」とはなり得ない。生徒たちの「

さんの意見が聞けてよかった」という声は、「異文化理解」など、従来から設定されてきた価値に加え、「ことばの公共性」という価値を英語教育の目的に据える可能性を示唆していると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

榎本剛士 2019年 「英語教育と目的論の再接続について：『コミュニケーション重視』の流れの中での試論」「自律した学習者を育てる英語教育の探求：小中高大を接続することばの教育として」印刷中【査読無論文】

榎本剛士 2019年 「ポリティックスの視点から考える教室のフィールドワーク：再帰的考察」『言語文化共同研究プロジェクト 2018 相互行為研究：談話とポリティックス』1-10頁【査読無論文】

榎本剛士 2018年 「言語イデオロギーとしての『英語教育』：中学校英語授業からの覚え

書き」『言語文化共同研究プロジェクト 2017 相互行為研究 : 談話とイデオロギー』  
19-28 頁 【査読無論文】

〔学会発表〕(計4件)

Takeshi Enomoto 2018 Poetics and performance as critical perspectives on foreign language socialization and classroom life (Sociolinguistics Symposium 22)

榎本剛土 2017 年 英語の授業における「英語」の多声的テキスト化について(「言語と人間」研究会 6月例会)

榎本剛土 2017 年 コンテキスト化の複雑性・階層性と第二言語習得: 「クロノトポス」と「スケール」概念を SLA 研究に組み込むための問題提起(拡大 NJ 研究会)

Takeshi Enomoto 2017 Stance-taking, scale-jumping and the dialogic emergence of learnables in an EFL classroom (The 15th International Pragmatics Conference)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等  
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。